的な意味をもつことがしばしばである。それはなかなか実現できることではないが、そういうことがなくては、歴史学はいつまでも成熟しないのではないだろうか。

それは、文書史料・文化財の登録の背景に存在する「地域文化登録」とでもいうべき作業になるのではないかと思う。史料ネットの活動の中で、やはり何といっても大きいのは、近現代史料の調査・保存問題が一括して本格的な形で議論されるきっかけとなったことであるのは衆目の一致するところだろう。それは近現代史史料の存在形態自体の検討に波及し、その存在形態を規定している社会構造そのものの変革の展望を歴史学に内在的な問題として検討せざるをえないという問題にも関わってきているようである。しかし、今後の史料保存運動・アーキヴィスト運動の社会的・文化的説得性を担保するためには、前近代史研究者の位置も大きい。そして、運動者の側は、前近代史の研究者に対して、100年後に研究しても同じことよりは、そろそろ、今やるべき調査・仕事と研究と運動を前進させるべきだという声を強める権利があると思う。

－ ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ － ¢ －

“なぜ、史料ネットの活動が可能になったか”を考えるべきでは？

塚田　孝　（大阪市立大学）

阪神大震災のあと、被災史料救出を行う史料ネットの活動が関西の歴史四学会を中心に開始された。私が委員を務める大阪歴史科学協議会もその四学会の一つとして活動に参加していた。はじめは何をどうしていいのか分からない手探りの状態から、徐々に軌道に乗り出したが、そこでの院生ら若手研究者を中心とした活動は目を見張るものがあった。私はそれを間近に見ながら、何か史学史上の大きな出来事に立ち会っているような気がしていた。それと同時に、院生たちが繰り返し活動に参加するうちに、何かと院生らにしわ寄せがいき、自分の研究のことなどで矛盾も発生してきていた。このような状況は、大阪歴科協の委員会での議論にも直接・間接に反映していた。私には、この状況を乗り越えるためには、この活動の意義を自分たち自身で深く理解する事が大切だと思われた。そこで大阪歴科協の委員会では、意識的に史料ネットの意義について議論をするようにし、95年12月の例会でも史料ネットのことをテーマに取り上げた（『歴史科学』146）。いろんな議論をしたが、それぞれに意義づけを深めていけたと思う。

私自身は史料ネットの活動には数度参加したに過ぎず、とても史料ネットについて全面的に評価することはできないが、史料ネットの活動には画期的意義があると考え、96年に担当した史学概論の講義の中で１コマ分だけだが、話をした。この史学概論は日本史・東洋史・西洋史からのオムニバス方式の授業なのだが、私は日本史の立場から歴史学と史料について話すことになっており、その中で取り上げたのである。

それまでに書かれていた史料ネットの中心にいる人たちの論稿を読みながら、史料ネットの経過を紹介し、いくつかの論点を考えた。そこでしばしば話題になっていたのは、ひとつは、活動を開始するのが遅すぎたのではないか、あるいは逆に、この時期に史料のことを言うのは被災した人達の感情に合わないのではないか、という相反する思いの対立であり、もうひとつは、回ってみると既に史料が捨てられていることが間々あり、市民の史料についての意識と歴史研究者のそれが乖離しているという点などである。意義を感じているからこそ活動している訳だが、文面では、どちらかというと活動の問題点が前面に出ているように思われた。おそらく活動の中心にいる人達は、自画自賛となることをはばかった面があるのではと推測する。同時に、やや性急な発想もあるのではないかとも思われた。ここでは、講義で取り上げた論点のうち、その点がより強く現れていると感じられた後者の点にしぼって少し考えてみたい。

性急と感じたのは、史料についての市民と研究者の意識の乖離という点に関わって、これまでの歴史学の無力あるいは市民の関心に歴史学が応えていないということのみが強く指摘されていたからである。しかしこの点はもっときめ細かにかつ歴史的に考えるべきではなかろうか。

今、近世の村方文書は（すべての人とはいわないが）多くの人が、大事なもの（史料）と言われれば同意するであろう。しかしこのような認識はずっと古い時期からそうだった訳ではない。戦